

# 関西学院大学 研究成果報告

2019年 4月 1日

関西学院大学 学長殿

所属：社会学部  
職名：教授  
氏名：李建志

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input type="checkbox"/> 特別研究期間 <input type="checkbox"/> 自由研究期間 <input type="checkbox"/> 大学共同研究 <input checked="" type="checkbox"/> 個人特別研究費 <input type="checkbox"/> 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	大日本帝国のなかの先住民—「比較先住民学」のための基礎研究（課題番号25283015）
研究実施場所	関西学院大学社会学部
研究期間	2018年 4月 1日 ～ 2019年 3月 31日（12ヶ月）

## ◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

本研究の前提として、李建志が研究代表としてとってきた複数の科学研究費による共同研究を深化させる必要があった。よって「大日本帝国は、発足当初から北海道と沖縄という非「内地」を抱え込んでいた。それと同時に、アイヌを「旧土人」として認識し、沖縄なかんづく先島諸島（宮古島および八重山諸島）の人びとを「未開」人として扱うという政治的な行動をとっていた。それは、英国などを筆頭とした西洋帝国主義の構造と相似形の存在であるといえよう」ということを、本研究費申請の段階で述べている。

本研究を進めるにあたり、今回は台湾の民族構成というものに注目することとなった。それは、言語的にはオーストロネシアに分類される台湾原住民（先住民）と、漢族と混じり合い住民から一定の距離がある平埔族、そして近代移行期（日本が植民地として台湾を領有する1895年以前）までに台湾に居住していた本省人（漢族で台湾省人という意味）、さらには日本敗戦後に中国国民党とともに台湾にやってきた外省人（漢族のうち台湾省以外からやってきたという意味）などという、極めて複雑な「民族」構成になっていることが、本研究を遂行する上で重要な位置づけとなるだろうと思われたからにほかならない。

ただし、台湾は日本の「外地」でありながら、同じく日本の「外地」であった朝鮮とは違い「貴族」も「国王」も存在しない、いわば「平民」の地とっていい場所であった。朝鮮はもとより、沖縄でも現地に「貴族」もいれば「国王」もいたわけであり、その意味でも台湾の民族構成を分析的に研究することは、「大日本帝国」という「意識的多民族帝国」の「平均的な人びと」すなわち日本「内地」の「平民」がどのような視線で台湾のそれぞれの「民族」を見ていたかを浮き彫りにするいい機会であると考えた。

そしてこの台湾を視察した李垠（1897～1970年。1907年に皇太子として冊封され、1926年に兄である純宗の死去にともない「李王」となる、李氏朝鮮王朝最後の「王」）が残した「台湾を視る」という文献を細かく分析し、論文化するところまで研究を進めてきた。これは台湾と同じ「外地」でありながら、「王」であったがゆえに大日本帝国の「準皇族」として受け容れられた高宗、純宗、李垠といった王家の人びとが台湾をどのように見ていたか、また李王家にかかわる事務を担当していた「李王職」の高官であった篠田治策（高学歴であり、日本の「内地」の平民でもあった人物）が「台湾を見る」を編纂しながらどのような視線を台湾のそれぞれの「民族」に向けていたのかを知る機会となるだろう。

これは一見すると今までの台湾研究と違いがないように思われるかも知れないが、朝鮮という日本に併合された地域の王族であり、日本の準皇族であるという特殊な地位の人間「王」がまなざしていた台湾を、篠田の視点と交叉させながら見ることでより立体的な「日本にとっての外地とはなにか」を研究する企てとなっているのである。そしてこの朝鮮「王」の視線という「補助線」を引くことで、大日本帝国が「外地」あるいは「準外地」として獲得していった他の地域（租借地たる関東州、委任統治領たる南洋庁、事実上の植民地である満州国）といった場所に生きるさまざまな「民族」、とくに満州国にいた「五族」をどのようにまなざしていたかを解く鍵ともなるだろう。

本研究は李建志の2019年度の台湾留学とその研究とも一脈通じるものであり、台湾での研究内容をより豊かにするための準備となっている。いや、それだけではなく、李垠という極めてめずらしい立ち位置の「大日本帝国準皇族」の内面をもえぐる内容にもなっている。その意味ではこの研究は、これからさらに深められ、さらに拡げていくことが可能な成果をだせるのだ。本研究の研究内容に関しては、まずその一部を2019年度内に、例えば社会学部の紀要や、言語教育研究センターの紀要で、複数の論文として発表する予定だ。論文を複数にすることの意味は、より支配構造をえぐるような分析をしたものは社会学部紀要で、より言語的あるいは「民族」的な意味での研究は主に言語教育研究センターの紀要で発表することがふさわしいと考えるからだ。

その上で、現在李建志がすすめている李垠の研究にも反映させることを確約しよう。李建志は李垠に関する評伝を執筆中であり、そのタイトルは『李氏朝鮮最後の王李垠』というものだ。その第三巻あるいは第四巻（全四巻。第一巻と第二巻に関しては、本学の研究助成金を得て、2019年3月末に出版）に本研究で得られた知見が反映されることとなるだろう。

このように、原住民（先住民）がいる「外地」としての台湾は、大日本帝国最初の植民地であり、ある意味で大日本帝国の支配構造の縮図となっている。そして朝鮮の「王」という存在はその大日本帝国の支配構造の矛盾を端的に示している。また先住民が存在していると認識されることはあまりなかった満州国が、複雑な「民族」構成であることは間違いないため、その支配構造を今までとは違った角度からのアプローチを提示することができるはずだ。そしてそのような研究態度は、大日本帝国の頂点に立っていた「日本人」の「内地平民」とはどのような存在なのかを問い直すことへと発展すると考えている。これらの研究を本学の研究助成を得てすすめることができたことに感謝している。

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。